

唐詩に詠まれた南北の風土

— 伝統的世界観と南北二分法の視点を通して —

(一)

今日、十億以上の人口をかかえる中国は、約九六〇万平方キロメートルの巨大な国土をもつ。その大きさはヨーロッパ大陸の総面積とほぼ等しく、ソ連・カナダにつぐ世界第三の大国である。東西両端の距離は五五〇〇キロ、経度の差六〇余度、時差は四時間、国土の東端で空が白みだすころ、西の端ではまだ真夜中であるという。

他方、南北間の距離は五〇〇〇キロ、緯度の差は五〇度である。試みに南の広東省の省都広州と、北の黒竜江省の省都ハルビンの気温差を見てみると、一年で最も暑い七月の平均気温は、広州が摂氏二八・三度、ハルビンが二二・五度で、その差はわずか六度にすぎない。これに対して、一年で最も寒い一月のそれは、広州が一三・七度、ハルビンがマイナス一九・七度であり、三〇度以上の大きな差がある。⁽¹⁾これは、中国大陸が世界の同緯度上において、夏は最も暑く、冬は最も寒い大陸性気候に属する地域であることに関連しよう。

また、平均気温二二度以上を夏、一〇度以下を冬とみなした場合、

植木久行

中国の春と秋の季節は、全般的にみて、長い夏と長い冬にはさまれた過渡期に過ぎないらしい。つまり、春夏秋冬の四季がいちおう明確でありながら、春と秋の季節がきわめて短いという点が、中国の自然風土の一特徴であるとされる。⁽²⁾

(二)

和辻哲郎著『風土』⁽³⁾のなかで「単調」・「空漠」と評された中国大陸は、近年まで「国境あつて国境の無い国である」⁽⁴⁾といわれた。島国である日本とは異なつて、固定的な境界線を引くことが不可能に近いことをいう。いわゆる「中国」なる概念も、歴史的に大きく変遷した。⁽⁵⁾紀元前三世紀以前の先秦時代の中国は、今の河南省、すなわち黄河の中流域を中心とした小地域にすぎなかった。その後、秦漢帝国が成立すると、漢民族の勢力は南へ伸び、いわゆる断髮分身の未開の種族たちが住む長江流域が、初めて中国の版図に加わつた。広東・広西両地区、いわゆる嶺南地方⁽⁶⁾の開発はかなり遅れ、一二世紀の南宋以後に始まる。いいかえれば、漢民族の勢力圏「中国」は、

南方に住む未開の種族を同化・融合、あるいは退散・追放をくり返しながら、絶えず南へ南へと拡張し続けたと評することができよう。逆説的にいえば、中国は「国境を規定できない国」、「国境を設定しない国」であった。

こうした奇妙な自己増殖現象は、中国の伝統的な自己中心的世界観、いわゆる中華思想（華夷思想）と密接に関連する。この地上の世界Ⅱ天下Ⅱ中国は、至高の人格神「天」の命を受けた、ただ一人の天子が支配する整然たる秩序と調和の世界であり、対立する外国の存在など、一切認めなかった。天子の住む都城は、そこに住む人々の必要のためというよりは、むしろ天・人・地の三圈をつらぬく世界の中心軸たる偉容をそなえるべく造営された。⁽⁶⁾そして輝かしい文化圏は、この都城を中心として同心円状に広がり、遠く離れるにつれて、文化的水準は次第に低下すると考えられた。天下的国家観に支えられた中華思想は、いわば地理的概念と文明意識とを表裏一体化して捉える一種の世界観であった。かくて、東・西・南・北の「四方」は、いずれも華麗な文明の光がうすれゆく辺境の地と認識され、そこに住む異民族を東夷・西戎・南蛮・北狄と称して人と見なさなかつた。狭義の「中国」とは、国中の意、文字どおり天下の中心軸として天子（周王）の住む「京師」（『詩経』大雅、「民勞」篇の毛伝）そのものを意味し、「中国人」とは、その都の中に住む人々をいう。中華思想の理念はまた、中国（Ⅱ天下）は「四海」にとりかこまれている、いいかえれば、中国は「四海の内」（海内）にある、という古

代的な宇宙観のもので育まれてきた世界像である。黄河中流域の、いわゆる中原と呼ばれる内陸部で文明を発達させ、おもに内陸部のみ往来し続けた漢民族は、みずからの住む「九州」の外に、四極↓四荒↓四海の地が同心円状に広がると考え、「九夷・八狄・七戎・六蛮、これを四海と謂ふ」（『爾雅』卷六、釈地）と説明する。つまり、「四海」という言葉は、天下の四方の果てに位置する、無智蒙昧の隣れむべき異民族が雑居する土地を指す。

これは、「海」の字が「晦」と音通し、「晦冥無識にして教誨すべからず。故に四海と曰ふ」（『太平御覧』卷三六、地の上に引く健為舍人の注）の解釈に由来する。いわゆる海からではなく、辺境地帯を吹く砂まじりの陰鬱な風を「海風」と呼ぶのも、こうした背景のためである。ちなみに、「海月」には、砂漠を照らす月を意味する用法もある。⁽⁷⁾

中国における、いわゆる海のイメージもまた、独特である。「海」は、河川から流れ込む不浄なものをうける一種のはきだめとして、「その色黒く晦き」ゆえに命名されたともいう（『釈名』釈水）。世界のはて、太陽の光もとどきかねる暗黒の地に広がる、不気味なおどろおどろしき存在であった。確かに、海には神仙の住む世界があり、真珠などの珍奇な物産に富むとも考えられたが、人間の認識能力を越えた、恐ろしい怪物の生息する不気味な黒い水の広がりであった。たとえば、人類の文化の樹立に一生情熱を傾けつづけた孔子が、乱れた世の中を嘆いて、「道行はれずんば、桴に乗りて海に浮かばん」とつぶやいた言葉を思いおこさせる（『論語』公治長篇）。ふと胸中をか

すめた嘆息にすぎないにせよ、そのつぶやきには、われわれの想像を絶した孔子自身の暗澹たる絶望感が深くにじんできていると考えるべきであろう。⁽⁸⁾

こうした海の固定観念は、七世紀以降の唐代になっても依然として続く。これはおそらく、詩人たちの大半が当時なお実際の海を見ることがなく、もっぱら『山海経』をはじめとする古典の知識にもとづいて作詩したことに由来するだろう。⁽⁹⁾ わが阿倍仲麻呂の帰国を見送る王維の送別詩の一節にいう、

鰲身映天黑　鰲身　天を映いて黒く
魚眼射波紅　魚眼　波を射て紅なり

実際の海を知らないであろう王維は、万里の波濤を越えゆく友人の舟旅のあやうさを、こう歌う。——波間に現れた大海亀は大空を隠さんばかりに黒々とそびえたち、えたいの知れぬ大魚の眼があかあかと波頭を射ぬくであろう、と。黒と紅の鮮明な色彩対比によって、怪物の横行する不気味な魔境を描きだす。これは、日ざしが燦燦と振りそそぐ快適な白い砂浜、白波のたちさわぐ明るく広い海、といったわが国の海のイメージとは大きく異なっている。

いわゆる中華思想が長らく温存されつづけたのは、少なくとも漢民族からみた場合、周囲をとりまく異民族が文化的にかなりおくれた野蛮な種族であったことによる。中国の文明は、周知のごとく、基本的には外国の影響を受けずに独自に成長し、展開をとげたものであった。しかも中国の政治・社会・文化のにない手である士大夫、

いわば知識人の思想、〈儒家思想〉は、孔子の「怪(怪談)・力(武勇伝)・乱(無秩序)・神を語らず」(『論語』述而篇)の言葉に端的に象徴されるように、神や超自然なことがらへの関心を抑制して感覚の放恣な飛翔を固くいましめた。逆にいえば、孔子は常日ごろ「常」(常識)「徳」「治」「人」を語ったとされる。

こうした漢民族の求心的な思考形態は、結局のところ、東西南北四方のかなたにある未知の自然や土地に対する探険心・冒険心を失わせる結果となったようである。昔の旅とは、一般的に商売や仕事(赴任・離任・転任・左遷)、求官、遊学、宗教上の求道といった確かな目的意識に支えられていた。

(三)

中国における北方と南方の意識の差異について考えてみたい。「北」の古い字形(甲骨文字・金文)は、二人の人間が背なかを向けあう姿であり、背なか、背なかを向ける意を表す。「背」の字の初文である。そして、敵に背を向けることから敗北・敗走などの意を派生した。方角としての北の意は、清の朱駿声『説文通訓定声』に、「人の坐立するや、多く明るきに面して闇きに背く。故に背を以て南北の北と為す」と指摘されるように、暗さや寒さを避けて背なかを向ける方向であった。これは、古代人の太陽崇拜信仰とも関連しよう。「素問」卷四、異法方宜論に、「北方とは、天地の閉蔵する所の域なり」とあるのも注意される。農耕社会における北のイメージは、あ

まりよくない。

このマイナス・イメージを増幅させたのは、北方のモンゴル高原（遊牧・狩猟に適した豊かなステップ地帯）やゴビタン（砂礫を含む固い土質の草原）に住む騎馬遊牧民族の、たび重なる侵入であった。漢民族は古来、匈奴をはじめとする塞外の騎馬軍団の波状攻撃に悩まされ、その脅威から国土と民を守るために、莫大な労力をかけて巨大な万里の長城を築いた。この驚異的な人工の障壁の存在は、漢民族がいかに北方の遊牧民族を恐れたのか、その恐怖の深さをまざまざと告げる。かくて、遊牧世界と農耕世界、玄奘の『大唐西域記』巻頭の言葉を借りれば、「馬主」の国（馬の多い土地）と「人主」の国（人の多い土地）とが、この長城によって南北に切り離されることになった。いいかえれば、華やかな文明の恩恵に浴する「城郭の民」と、定住地をもたない野蛮な「行国の民」「行国随畜の民」とが、この長城の内と外で激しく対立すると意識されたのである。こうした境界線を設けることは、天下的国家観をもつ中国にとって、決して名譽なことではない。この長城の存在によって、中国人の認識における北の概念は明確化され、みずからの意志で長城をこえて「北」方へ赴くことはなかった⁽¹¹⁾。野蛮と暴力の荒れくるういまわしい方角としての北は、このように認識されたのである。

一方、「南」には、人工の境界線は造営されたことはなく、いわばフロンティアの気分がただよっている。桑原隲蔵の「歴史上より観たる南北支那」のなかに、「支那の歴史は一面から観ると、漢族の文

化の南進の歴史ともいえる」と指摘されるように、膨張する漢民族の進路は、同じ農耕民族が住み、気候的に温暖・湿潤な南方にあった。残忍な遊牧民族の住む北方には、すでに述べたように、長城を築いてみずから進路を閉ざした。他方、東と西の場合、えたいの知れぬ海と「平沙万里 人煙を絶つ」（岑參「碛中作」）砂漠、という過酷な大自然がおのずからその行く手を阻んでいた。かくて、中国人の「南方」観念は後世に下るほど、南へ移動していく。陳正祥の『中国文化地理』によれば、唐・宋時代の南方は一般に淮河・漢水以南であったが、明朝公認の南北境界線は、より南の長江であった（明代、科挙（高等文官試験）で定めた南北の境界にもとづく）。現代の中国人は、この線をさらに南下させ、南嶺山脈（五嶺）を南北の境界と見なし、現在の広東省・広西壮族自治区こそ南方らしいと意識するといふ。この指摘は、南方を考える際の一つの示唆を与えてくれるようである。

「南」の字は、「暖」の字と音声が近く、『素問』異法方宜論には、「南方とは天地の長養する所（自然物がよく成長・繁茂する）、陽（気）の盛んなる所の処なり」といふ。また、南の地は「地勢 食に饒かなれば、飢饉の患ひ無し」（『史記』貨殖伝）ともいふ。漢民族は、中原の地（黄河中流域）が北方の異民族に占領されたとき、この食糧豊かな南方の地を格好の避難地として利用した。このため、かつて「卑薄の域」（土地が低くて地味のやせたところ）と呼ばれた長江流域の低湿地帯も、次第に開発が進み、佳麗の地と目されるようになる。

とはいえ、唐代にあつても、南中国の南部、すなわち今の湖南省・江西省の南部、福建省、広東省、広西壮族自治区などは、依然として文化的に遅れた未開地であつた。なかでも広東・広西のいわゆる嶺南地方は、住民の大半が言語・風俗・服装・文化を異にする「蛮夷の区」であり、漢人はといえば、政治犯罪者とその家族が遠く流されるところであつた。

南の地は徐々に開けていったが、やはり漢民族のふるさととは黄河の流れる北の中原地域であつた。この客寓(他郷での仮すまい)意識は絶えず南方の地にたゆたい、六朝期には「猿声」、唐代には「杜鵑」の詩材を発見する契機となつたようである。北宋以前、文化の中心は、六朝後半(南朝時代)の一時期を除いて、おもに西安(長安・洛陽・開封のごとく、黄河中流域とその支流渭水を結ぶ八東西方向)に移動はしたものの、絶えず中原地区に存在しつづけた。南北の統一された唐代、おおむね官僚として活動した詩人たちの生活圏は、赴任もしくは左遷というかたちで、長江流域の異質な風土に接触することになる。この場合、隋代に完成した大運河が、南北の交流を促進することになった。猿声と杜鵑は、ともに長江系の風土を表す主な詩材として注目される。

六朝時代、奔流、岩を噛む長江上流の難所、三峡地帯には、

巴東三峡巫峽長　巴東の三峡　巫峽長し

猿鳴三声淚霑裳　猿鳴くこと三声　涙　裳を霑す

という「漁者の歌」が広く伝わっていた。当時、三峡地帯には長臂猿

が多く生息し、その清遠な鳴き声は山々や谷々にこだましながら、舟旅に苦しむ人々の旅愁をさそつた。南朝期の文学の実作者と享受層は、おおむね永嘉三〇七―三三三の乱のとき、北中国に侵入した塞外種族の支配を嫌って南下した、北方の漢人の名族たちの末裔であつた。その南遷の人口は約九〇万、北方に住む人々のうち、八人のうち一人が南下したといわれる民族の大移動であり、それはまた、南朝の人口の六分の一を占めると推定されている。いわゆる南朝の華麗な貴族文化は、都建康(江蘇省南京)を拠点に、この南下した名族を中心にくり広げられたものである。彼らの心中に潜在化する客寓意識は、黄河系の詩材とは異なる新鮮な風物を発見して、さすらう旅人としての悲哀を託した。一望千里の大平原のうえを馬や車・驢に乗って旅する北中国の風土になれた人々にとって、舟旅のあやうさ、苦しさは想像を越えるものがあつたはずである。とりわけ三峡地帯の舟旅は命がけであり、その苦労は計り知れないものがあつた。このとき、啼きて住まざる猿の鳴き声は、旅の苦しさ、悲しさをいっそう深めたものらしい。もともと鋭角的な音色を好む漢民族にとって、猿のカン高い鳴き声も、詩の素材としての調和を破るほどの違和感を生じなかつたに違いない。獼猴は北中国にも生息していたが、なじみは薄く、一般には西安(長安)の南に横たわる秦嶺山脈(黄河流域と長江流域の分水嶺)がサル生息の北限と考えられていた。中原の人々にとつて、なじめぬ土地の異様な景物として理解されたであろう。李白の「秋浦(安徽省貴池)の歌」には、こう歌われている。

君莫向秋浦 君 秋浦に向ふ莫かれ

猿声碎客心 猿声 客心(旅心)を碎かん

他方、ほととぎす(杜鵑・子規)の詩材としての定着は、猿声よりやや遅れ、唐代以後のことである。長江上流の蜀の地(四川盆地)の王、望帝杜宇は、家臣の妻と密通したことを恥じ、帝位をゆずって国を去り、やがて落魄して死んだが、その魂が杜鵑に化したという。つまり、ほととぎすは落魄した王の、なれの果てともいうべき憐れな姿であった。一般に晩春に鳴き、口から血を吐きながら悲痛になく不吉な鳥と意識され、その鮮血に染まった真紅の花が杜鵑花・山石榴であった。ツツジ・サツキのたぐいである。ほととぎすの鳴き声を最初に聞きつけた人は親しき人と別れる運命になるともいい、やがて、旅先で死んだ望帝杜宇が望郷の悲しみをこめて「不如帰(去)―帰るにしかず」と鳴く、と聞きならされるようになる。中国の杜鵑・子規は、わが国のような可憐な美しい鳥ではなかった。この杜鵑も、黄河流域には生息せず、本来、蜀に繁殖する鳥として蜀魄・蜀鳥などとも呼ばれたが、しだいに長江系の詩材として広く詠まれるようになる。元和十一年(八一六)、白居易は左遷の地、長江下流の江州(江西省九江)で、

其間旦暮聞何物 其の間 旦暮 何物をか聞く

杜鵑啼血猿哀鳴 杜鵑は啼血し 猿は哀鳴す

と歌った(「琵琶行」)。都の長安から遠く左遷された詩人の望郷感をかきたてるものとして、杜鵑と猿の悲しい声がとりあげられている。

猿にしろ、杜鵑にしろ、生息する地域性・地方性はかなり濃い。その鳴き声が望郷感や旅愁を深める長江系風土の詩材となるのは、政治や文化の中心でありつづけた黄河系風土とは異質の、一種の心理的な違和感に根ざすものであろう。

(四)

詩材としての風土を考察する場合、やはり「南船北馬―*chuan bei ma*」に象徴される南北の風土上の差異を充分理解しておくことが必要であろう。北方そだちの白居易は、「北土」には生じない南方の愛すべき貞勁秀異なる植物として、桂樹・竹・蓮の花の三種をとりあげ(「潯陽三題」序)、「吾聞く 晋汾(山西省)の間、竹少にして重んずること玉の如し」などと歌っている。また木下李太郎「支那南北記」には、「禪宗坊主」の言葉として「南地竹兮北地木」を紹介している。本来、亜熱帯植物である竹は確かに南方を彩る植物であり、家屋を作る材料としても用いられた(張籍「江南曲」)。このため、南方では火災が多く、古来、南方を征伐するときには火攻めを用いたという。杜荀鶴の「友の呉・越(江南)に遊ぶを送る」詩に、

有園多種橘 園の 多く橘を種うる有り

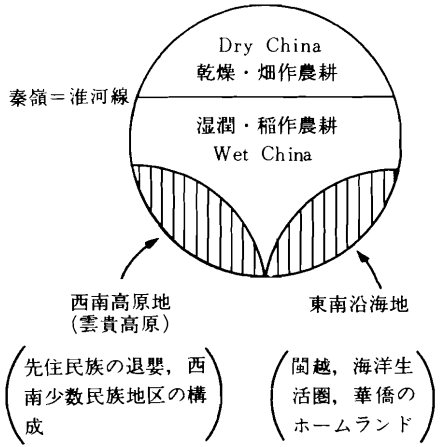
無水生蓮 水の 蓮を生ぜざる無し

と歌われるのも、南方特有の橘と蓮を取りあげて旅情をかもし出したものである。

従来、中国の地域分類として一般に二分法が用いられている。こ

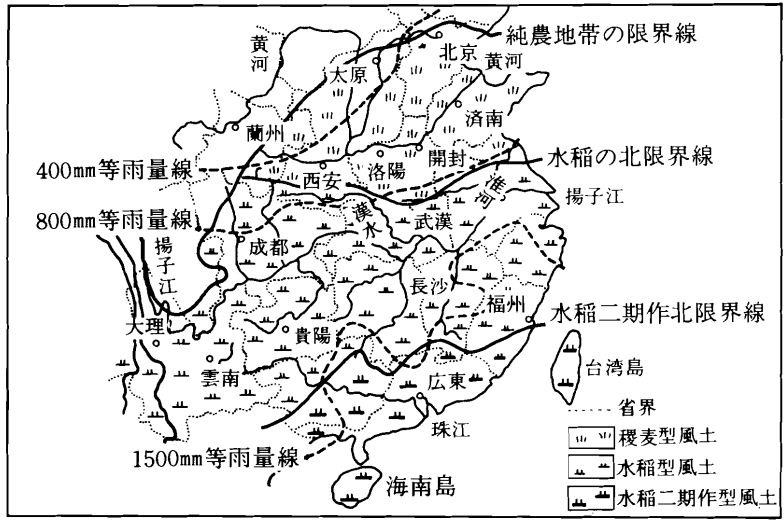
の「中国」とは、秦の始皇帝の天下統一によってほぼ形成された、黄河・長江・珠江の三大河川の流れる、いわゆる固有中国（China Proper）を指す。中国という言葉が今日の用法（国家の通称）に近づくのも、秦漢統一以後のことであった。

二分法とは、唐の都長安の南に横たわる秦嶺山脈（長江流域と黄河流域の分水嶺をなす全長約一五〇〇キロの山脈と、黄河と長江のほぼ中間を東流する淮河（二二〇〇キロ）を結ぶ「春嶺—淮河」線である。より詳しく「秦嶺—伏牛山（河南省の山脈、秦嶺の支脈）か、そのやや南の漢水（長江の支流）—淮河」を結ぶ線と考えてもよい。



華北と華南の対比(松田案)

この南北境界線は、気候的には、ほぼ八〇〇ミリの等雨線、および最も寒い冬（二月）の平均気温零度Cの等温線とかさなる、いわば



中国の土地利用と風土的区分(Buckの「中国における土地利用」を参考にして松田作図)

乾燥と湿润、温带と亜热带とが二分される境界であった。(『松田壽男著作集』5、アジアの歴史(六興出版、一九八七年)所収の二図参照)。南北ともにモンスーン地帯に属しながら、北側は乾燥した、雨の少ない畑作地帯であり、逆に南側は適雨か多雨の温暖・湿润な稲作地帯であった。年間降雨量が六〇〇ミリ前後（わが東京は一五〇〇ミリ）にすぎ

ない「夏雨区」(雨が七月・八月に集中)である北中国では、乾燥に強い
 禾・黍あわ・小麦こむぎ・高粱こうりやんなどの雑穀が栽培された。黄河流域に広がる黄
 土は、炭酸カルシウムを多量に含み、中性かアルカリ性で雑穀の生
 育に適する肥沃な土壌であった。しかも多孔質で通気性にとみ、碎
 けやすいので、粗末な農具でも容易に耕すことができた。ただ乾燥
 しているので日でりに苦しみ、灌漑が不可欠である。

畑作物のなかでは、人手がかからず、肥料も不要な高粱は、五千
 年以前からすでに黄河流域に広く栽培されており、その使用範囲の
 広さは、まさに驚異的といつてよい。

高粱の実は主食料であり、又酒・酸の原料となり、又其粕は家
 畜の肥料とされる。其茎は箒・タワシ等の製造原料となり、又長
 き、強き茎は家屋の壁の中に編み込まれ、又屋根を葺ふくに用ゐら
 れる。尚ほ一般に高粱の茎は麦藁と共に燃料となる。

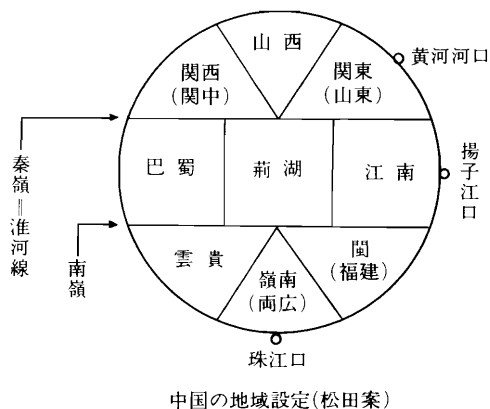
(西山栄久「中支那」)

さらには、冬の北風を防ぐ垣根としても利用された。つまり、六
 朝期、早くも黄河流域の平原地区では森林が姿を消してしまい、禿
 山の多い北中国にあっては、夏、急激に背だけを伸ばす高粱畑は、
 「一年生の自然林」(西山の前掲書)として、燃料や建築材料の代用に
 もなる有用な作物であったわけである。

南北における農作物の差異は、「南人吃米、北人吃面——*nán rén*
chī mǐ běi rén chī miàn」⁽²⁰⁾という言葉を生んだ。南方の主食は米、
 北方の主食は小麦粉製品、たとえば饅頭まんとう(皮の厚い一種の蒸しパン)や

メン類であることをいう。ただし、唐代の北中国では、アワやキビ
 が主食で、餅もち(小麦粉食品の総称)が流行したという。⁽²¹⁾

「秦嶺—淮河」線は、単に気候や産物による区分であつたわけ
 はなく、じつは同時にまた、歴史に裏付けられた南北の境界線でも
 あつた。(『松田壽男著作集』5所収の「中国の地域設定図」参照)。春秋・戦
 国時代の北漢民族と楚せ(非漢民族)、六朝後半の南北朝の対立、金(女
 真族の征服王朝)と南宋など、中国が北と南に別れる場合、ほとんどこ
 の「秦嶺—漢水—淮河」線で二分され、天然の要害「長江」によ
 って対峙することはまれである。⁽²²⁾これは、長江が国境になると、南
 朝政権存続の生命線ともいふべき長江の水運がほとんど使用不可
 になるためである。河川の活用は、兩岸の確保を不可欠とする。か



くて、南の政権はまさに背水の陣をしいて長江の北岸を確保したのであった。

この南北二分法は、要するに黄河水系と長江水系に着目して形成された地域区分でもあった。漢民族は、古来、一貫して低地に定住する志向を持ちつづけた低地民、しかも水ぎわの民であった。³⁸⁾ 河川から種々の恩恵を受ける「河川国家の民」とも称される、水との密接な結びつき、「地域即河川域」の構図を考えるならば、この南北二分法は、まことに中国独特の風土に根ざした地域区分であると評せよう。中国の（外流）河川自体、この「秦嶺—淮河」線によって二分類することができる。

北中国の河川は、夏の水量は充分であったが、冬季、渇水もしくは氷結するため、水運の利用が不可能になる。なかでも黄河は氷結することはもちろん、古来、「水一石、泥六斗」（漢書・溝洫志³⁹⁾）、「一碗の水、半碗の泥」と称される黄濁したどろ水であり、流れのゆるやかなる下流では、いわゆる天井川となり、時に大洪水を起こし、河道も変えた。河道が比較的安定していた唐代でも、二十一回におよぶ黄河の決潰が発生したという。⁴⁰⁾

一方、南中国の河川は、年間を通じて水量が豊かで氷結しないため、舟運の利用は季節を問わない。今日、南方の河川の流量量は全国総水量の約十分の九、北方はわずかに十分の一であると報告されている。⁴¹⁾ しかも南方は一望千里の大平原が広がる北方とは異なり、山岳や丘陵が多く、無数の湖沼が各地に点在する。そのうえ、「土地

卑湿にして虫蛇多く」（張籍「江南曲」）、高温多湿のために風土病が蔓延する瘴癘の地であったため、舟の利用の持つ意義は、このうえなく大きかった。南方では、長江やその支流の水運を充分活用できなければ、日常生活そのものが成立しがたいといえよう。南の王朝が決死の覚悟で長江の北岸を確保したのは、この意味で当然であり、長江が「黄金水道」とたたえられるのも、きわめて興味深い。

このように見てくると、「秦嶺—淮河」線は、いわば地理性と歴史性とを総合して捉えられた中国の風土の南北境界線であったといふべきであろう。淮水による南北の風土差は、じつはすでに古代の中国人によって直観的に認識されていた。『周礼』考工記には、「橘（今日の朱橘）は淮（河）を踰えて北するときは枳（じつは酸橙を指す）と為る」とあり、略して「南橘北枳」、「橘化為枳」（橘化して枳と為る）ともいう。⁴²⁾ この言葉は、気候条件や水質・土質などが果樹の生産や果実の品質に影響を与えて、淮河以北の北中国では、橘（ミカンの類い）が見られないことをいう。

『列子』湯問篇では、橘を「檿」（柚と同じ）に作る。『周礼』や『列子』では、ともに「地氣（土地の風氣）然すればなり」とし、「晏子春秋」卷六、雜下では、「水土異なればなり」と説明する。南北の風土の差を、具体的な一物を通して理解していたことを示す事例である。亜熱帯植物である柑橘類は、秦嶺・淮河以南が適地であり、張籍の「江南曲」詩にも、「江南の人家 橘樹多し」と歌われている。⁴³⁾

(五)

こうした著しい南北の風土差は、おのずから対照的な文化をはぐくんだ。鈴木虎雄は、この点について、「江域は優美、河域は雄勁、を特徴とす」と指摘する。また青木正児は、「文学の地方色」のなかで、「北方の文芸は質実適勁、南方の文芸は浮華靡麗」と結論づけ、より詳しく次のように概説する。

其の風土に於て概して南方は氣候温暖、土地低湿にして草木繁茂し、山水も明媚であり、天産物に恵まれてゐる。北方は之に反して氣候寒冷、土地高燥にして草木少く、風景の佳なるもの稀であつて、天産物に乏しい。故に南方の民は生活が比較的安樂であり、南国的な空想や瞑想到に耽る余裕がある。従つて民性は浮華で、空想的であり、情熱的であり、詩的である。而して其の文芸思想は耽美的浪漫主義に赴き、逸樂的な華美遊蕩に流れる傾向がある。之に反して北方の民は生活の為に努力を要する。従つて其の民性は質朴で、現実的であり、理智的であり、散文的である。而して其の文芸思想は功利的現実主義に赴き、力行的な質実敦朴を旨とする傾向がある。

この青木説は、いわば集大成と評しうるであらう。北方と南方では、さらに儒家思想と老莊思想、善の追求と美の追求の相違が指摘されることもある。⁽⁴⁵⁾ ちなみに、馬場鞆太郎の「南支那」⁽⁴⁶⁾の論も引用しておきたい。

北支那の住民は嚴寒と酷暑による猛烈な氣候のため、自然に對

する酷烈なる争闘を必要とし、自ら強健なる體質性と忍耐性とを養成されるが、南支那の住民は其亜熱帶的氣候と輕易なる生活条件のため、柔弱に流れ易く、輕快なるも刺激され易く、改革を好むの氣質を助成される。従て南支住民は北支住民に比し理解力は優れるが、堅実でない。且漸進の美風に缺けている。⁽⁴⁷⁾

「地大物博—*di dà wù bó*」(土地が广大で物産・資源が豊か)と一口に評される中国の場合、南北の風土差と文化・氣風の相違は、かなり明確かつ多様であるといふべきであらう。

(六)

終りに、「詩材としての風土」という観点から、唐詩に詠まれた南北の代表的な風土に少し触れてみたい。南中国の大地は、土の色のあかい紅壤(紅土・紅泥)区であるが、北中国の大地は、周知のごとく、視界を淡黄の一角にぬりつぶし、荒涼たる広漠感をあたえる黄土である。⁽⁴⁸⁾ いわゆる黄土台地は、モンゴル高原や中央アジアの砂漠地帯の細かな砂塵が、かの蒙古風にのつて堆積したものである。他方、華北平原の黄土は、黄土台地を浸蝕しつつ流れる黄土が主にもたらした堆積物であつた。乾燥した黄土の微粒子は、直径が約〇・〇一から〇・〇一ミリメートルであり、風が吹くとすぐに粉のように舞いたつて天空を黄色くそめた。冬から春、西北風の吹きよせる北中国では、とくに陰曆二月三月の仲春・晩春のころに、いわゆる蒙古風が吹きあれて、「黄塵万丈 天日為に暗し」などと称される

乾燥した北中国独特のすさまじい黄砂現象がしばしば発生した。このため、「風ふきて土を雨ふらす」（『説文解字』卷十二下）「霾」という漢字も生まれ、すでに『詩経』邶風「終風」のなかに、「終に風ふき且つ霾」と歌われている。乙女心をふみにじる男の身勝手さ、心がくらみまどろえるさまをいう興という手法らしい。

黄色い砂塵が霧のように視界をさえぎる黄砂現象は、北斉の魏収撰『魏書』卷一一二、靈徵志上には、次のように記されている。

○雨土如霧於洛陽（四三八年正月）

○土霧竟天、六日不開（四八八年一月）

○秦州黃霧、雨土覆地（五〇二年二月）

○涼州雨土覆地、亦如霧（五〇三年八月）

○土霧四塞（五〇六年正月）

「雨土（土を雨ふらす）」、「土霧竟天」（土の霧 天に竟し）、「黄霧」、「雨土覆地（土を雨ふらし地を覆ふ）」、「土霧四塞（土の霧 四もを塞ぐ）」など、黄砂現象を表現する独特の言葉が興味を引く。なかでも「黄霧」は、六朝・宋の詩人鮑照の詩に「沙を騰げて黄霧を鬱んにす」（還都道中作）と歌われている。

また、西北の砂漠地帯から北中国にいたる陰鬱な風土を表す詩語に、「黄雲」がある。この「黄雲」は、すでに述べた「黄霧」とほぼ同じく、烈風によって巻きあげられた黄砂のために、一面に黄色くそまつた天空や雲霧、あるいは、雲状をなす黄塵（黄埃）をいう。黄土と砂漠の塵埃が本質的に同種のものであることを考えれば、「黄雲

塞を出でて多し」（郎士元「送李將軍赴定州」）の詩句も理解しやすい。砂漠地帯では、サリク・ブラン（黄色い砂嵐）が猛威をふるい、人の命もしばしば失われたが、春から夏にかけては、猛烈なカサ・ブラン（黒い砂嵐）が吹き荒れるという。

黄河の流れゆく華北平原では、しばしば黄砂現象がおこった。儲光羲の「效古」詩には、

河洲塵沙起 河洲に塵沙起こりて

有若黄雲浮 黄雲の浮かぶがごとき有り

と歌われている。「河洲」とは黄河のなかすの意。高適の有名な「董大に別る」という詩は、「黄雲」の語を用いて苛酷な北中国の風土を背景に描く作品である。

十里黄雲白日曛 十里の黄雲 白日曛り

北風吹雁雪紛紛 北風 雁を吹いて雪紛紛たり

莫愁前路無知己 愁ふる莫かれ 前路に知己無きを

天下誰人不識君 天下 誰人か 君を識らざらん

黄砂が北風に巻きあげられ、輝く太陽の光さえもすっかりかげり、雪がしきりに舞い散っている。小杉放庵の「満支の旅」にいう、

雲なき空がどんよりと曇って、太陽が白けるほど、或は太陽が見えぬほど、細砂煙塵高く揚り、やがて風が静まってからも、霧

雨のような砂の雨。……その天上の細砂が雪に交る時赤き雪となり、雨に交る時血の雨となる。

これによれば、詩中の「紛々たる雪」は、不気味に赤く染まって

いたであろう。高適の詩は、通常の離別詩にありがちな悲哀の情の放恣な表白という手法を峻絶し、北中国特有の陰鬱な風土をあるがままに描くことよって、男性的なりしズムがかももし出されている。その荒涼たる風土描写は、そのまま旅先で親しき友を送る作者自身の暗澹たる心象風景にもつらなるであろう。

乾燥すると砂ぼこりが立ちやすい黄土の性質を踏まえた詩語に、都会の繁華なありさまを形容する「紅塵」(紅埃がある。古くは漢の班固「西都長安の賦」に「紅塵四もに合し、煙雲に(空の雲にまで)連なる」と見え、その李善注に引く李陵の詩には、「紅塵 天地を塞ぎ、白日何ぞ冥冥たる」とある(「文選」卷二)。おもに雑踏する車馬や人ごみのために、しきりに舞いたつ紅い土ぼこりをいう。晩唐の盧延讓の「寒食の日、戯れに李侍御に贈る」詩には、花見の客であふれかえる都大路(十二街)のにぎわいぶりを、

十二街如市 十二街 市のごとく

紅塵咽不開 紅塵 咽んで開かず

と歌っている。黄土大地の生活になれ親しんだ人々にとって、舞いたつ黄塵は必ずしも不潔感や嫌悪感とは直接結びつかないらしい。魏信陵の「長安道」詩に「紅塵も猶自香し」と歌われるのは、このことを物語る。「黄塵」ではなく「紅塵」と表現するところにも、「紅」を好む中国人のプラス・イメージが反映していよう。今日、祝いごとを「紅事 hóng shì」と呼ぶことも思い起される。

同時にまた、黄土が水分を含むと紅く見えるように(前引の小杉放庵

の文参照)、乾燥した黄塵・黄土自体が多少紅味を帯びていることにも関連するようである。この点については、田口暢穂の論文⁵⁴⁾に見える次の記述が参考にならう。

沢田瑞穂・波多野太郎両博士の御教示によれば、大陸では非常に細かな砂塵が空一面に舞い、太陽さえ曇ってあかくぼんやりとみえるようなことがある。そんなときに俄雨でも落ちてこようものなら、衣服に代赭色の斑点が残ったりするのである、との由であった。…… 紅埃・紅塵も赤煉瓦色の黄河の水も、黄砂のごく微細なもの呈する色なのであるが、感覚的には「黄」というより「紅」が相応しいということであろう。とすれば、チリ・ホコリや股賑をきわめる都城の雑踏に紅を冠するのはごく自然なことといえるし、積もった埃を紅埃と表現するのをもまた、怪むに足りぬ。

(七)

乾いた北の大地に対して、南方は風光明媚な水郷沢国である。湘江・漢水・贛江などの流れこむ長江流域には、六朝後期以降、急速に巨大化した洞庭湖や鄱陽湖を中心とする広大な低湿地帯があった。九百里四方という巨大な湖「雲夢の沢」を中心とする湖沼地帯も、かつては漢水の流れ込む江漢平原に存在した(長江の北)。さらに、長江下流のデルタ地帯は震沢・具区などと呼ばれた太湖を中心に水郷地帯を形成した。長江流域には、年間降雨量一〇〇〇ミリメートル以上の等雨線が走り、この豊かな水を背景に舟運の便にすぐれてい

た。李肇の『唐国史補』巻下には、

凡そ東南の郡邑（州県）は、水を通ぜざる無し。故に天下の貨利（貨財の運送）は舟楫、多きを居めり。

と記される。

叢林や湖沼が多く、じめじめとしたどろ地（沮洳地）であった長江流域は、六朝期、治水と水田開発が急速に進んで豊かな穀倉地帯に化しつづつあった。しかも南朝政権のもとでは、北朝をしのぐ華麗な貴族文化が栄え、しだいに光と風と夢と酒にみちあふれた佳麗の地と目されるようになる。なかでも長江下流の江南地帯は、乾いた広漠たる北方出身の詩人たちにとって、深い思慕の情をかきたてる美しい風土であった。唐半ばの安史の乱以降、強大な軍閥が各地に割拠して戦乱のつづく北中国をよそに、長江流域はおおむね平和で、経済的にも著しく進展していた。中唐の鄭概は「状江南（孟秋）」詩のなかで、豊作を予祝する水田の美しさを、

江南孟秋天 江南 孟秋の天

稻花白如氈 稻花 白きこと氈のごとし

と歌っている。孟秋は初秋、氈とは、もうせん・じゅうたんの意。江南の春の美しさは、北方出身の詩人たちにとって憧憬そのものであった。白居易は、その美しさを追憶して、こう歌う（「憶江南」）。

日出江花紅勝火 日出づれば 江花 紅なること火に勝り
春来江水綠如藍 春来れば 江水 緑きこと藍のごとし

能く憶江南 能く江南を憶はざらんや

「千里 鶯鳴いて 緑 紅に映ず」で始まる杜牧の有名な「江南の春」の詩にも、やはり、われわれの想像を越える北方人特有の深い思慕の情がこめられ、それゆえ一層、江南の春景色の描写は、読者の心を魅了するらしい。江南地方の春は、じつは「冬の終わりがらすぐ夏がきてしまひ、春はただその繫目に僅かに中間季節としておかれてある」と云つた感じさへする（後藤朝太郎「最新支那旅行案内」）と指摘される、いわば一月にも満たない春の季節の極端な短さによつて、その愛着はますます増幅されたようである。しかも、その後には、「呉牛 月に喘ぐ」といわれる夏の酷暑、北方人にとっては耐えがたい蒸し暑さが、迫り来ていたからである。

江南を代表する「水郷城市」蘇州が、唐詩のなかで、どのように詠まれているか、少し見てみたい。太湖平原にある蘇州は、江南地方で最も早く開けた古都であり、唐代、韋応物・白居易・劉禹錫らの著名な詩人が刺史（州の長官）として赴任したところである。蘇州城の西郊から南郊にかけて、煬帝の造宮に成る大運河の一つ、江南運河が通り、また西には太湖をひかえ、水上交通の要衝として栄えた。白居易の詩に、「水道 脈のごとく分かれ 權 鱗のごとく次なる」と歌うように、蘇州城の内外には、まるで血管のごとく張りめぐらされた小運河が縦横に交錯し、無数の舟が引きも切らず往来していた。

蘇州は、橋と柳の多さで知られた。白居易の「正月三日閑行」詩

には、水郷の美しさを、

緑浪東西南北水 緑浪 東西南北の水

紅欄三百九十橋 紅欄 三百九十の橋

と歌い、後句には「蘇の官橋の大数」という自注がある。唐代の蘇州城の橋は、今日のような磚石造りではなく、朱ぬりの木の橋であったが、もちろん舟の往来に支障のないアーチ型の太鼓橋（反橋）であった。いわゆる「虹橋」である。こうした運河の城市のありさまは、南宋時代（一二三九年）の石刻「平江図」によって充分推し量ることがができる。クリーク沿いの数知れぬ垂柳も有名であり、やはり白居易の詩に「老来 処処 遊行徧きも、蘇州の柳最も多きに似かず」（「蘇州柳」と歌われている）。

蘇州の風物をみごとに描き出した詩を一首あげよう。晩唐の杜荀鶴の「人の呉（蘇州）に遊ぶを送る」詩である。

君到姑蘇見 君 姑蘇到らば見ん

人家尽枕河 人家 尽く河に枕むを

古宮閑地少 古宮 閑地少く

水港小橋多 水港 小橋多し

夜市亮菱藕 夜市 菱藕を売り

春船載綺羅 春船 綺羅を載す

遙知未眠月 遙かに知る 未だ月に眠らず

郷思在漁歌 郷思 漁歌に在るを

姑蘇は蘇州、古宮は、かつて呉の都であったことを指す。頸聯は、

商業都市としての一側面を歌う。夜市（夜間営業の市場）には、湖沼で採れた新鮮な菱の実や蓮根（蘇州は傷藕の特産地、『唐国史補』巻下参照）が売られ、往きかう舟には、蘇州特産の綺羅（呉綾）が満載されている。唐代の後期、北方の桑畑が荒れたのに乗じて、蘇州周辺では養蚕業が盛んになりはじめていた。「夜、すなどりする漁師のうたう歌が望郷の思いをかきたてるであろう。」と歌う尾聯も、蘇州の詩の結びに似つかわしい。呉の地は、古来、特殊な方言地域としても知られる。

詩中の「人家尽く河に枕む」とあるのは、蘇州城が道路と小運河を表裏一体として造営された都市構造をもつことをいう。各民家は、道路を前に、小運河を後ろにするように配置されている。この形態は、「水面の持つ吸熱・通風・吸塵の効果を利用して居住環境を高めると共に、運河を交通・運搬の手段として利用することを目的とした」ものであろう（植木久「蘇州の町並」）。城内の道路が狭いのも、家の軒下にまで迫る水路のほうが利用に便利なためである。蘇州城南郊に住んだ晩唐の詩人陸龜蒙は、馬に乗らずにもっぱら舟を愛用し、書物・茶竈・筆牀・釣具を載せて清遊したので、人々は彼を江湖山人と呼んだという（『新唐書』巻一九六、隱逸伝）。

確かに、南中国の人と川の結びつきは至って深い。人々は川岸に石の階段を設け、「ズボンの洗濯をするのも、米を磨ぐのも、みな同じ石段を下りて来てやるのであるから、衛生と云ふ点から云へば、すこぶる怪しく（後藤朝太郎『最新支那旅行案内』）、そのうえ「馬桶（ふ

たつきのおまる)でさえも、同じ長江やクリークの水で洗います。果して白居易の詩に歌うごとく、「緑浪」であったかどうかは保障のきりではない。もちろん、南方の人々の飲料水は、芥川竜之助が「金鑪きんろに近い代緒たいしよ(あかつち色)」と形容した長江の濁流やその支流、湖またはクリークの水であった。⁶⁷⁾張籍の「江南曲」詩に、「井いど無くして家潮水(江水)を飲む」と歌う。しかし、水と雨の乏しい北方で共同の井戸や貯えた雨水をほそぼそと利用する状況とは大きく異なっている。やはり水と光にあふれた南国であり、乾いた大地に生きた人々を引きつける美しさが充分あったに違いない。

このようにみえてくると、中国を南北に二分して、詩材としての風土」という観点からながめる方法は、豊かな唐詩の世界を系統的、総合的に把握する一つの有効な試みであろう。詩人の出身地域に配慮しつつ、南北それぞれの地域特有の風土が、いかに表現されているのか、北と南では素材・題材の面で、どんな傾向が見られるのか、これらの課題を、関連する歴史地理学の成果を援用しつつ理解することは、世界文学として通用しうる唐詩の世界を分析する意味でも、重要な試みの一つになるに違いない。

(注)

- (1)以上の記述は、主に外文出版社刊『中国』(一九八四年)による。
- (2)松浦友久『中国詩歌原論』(大修館書店、一九八六年)に収める『中国古典詩における「春秋」と「夏秋」』参照。
- (3)岩波書店、一九六三年改版の第三章「モンスーンの風土の特殊形態」
- (4)『地理講座 外国篇第二巻 支那』(改造社、一九三三年)に収める小川琢治

「概説」。その文には、引き続いていう、「歴史時代にその勢力が次第に発展膨張したのは、異民族の地方が支那文化の波及により開拓され、同化されて一大文化地域を形成し、其の中心を支那が占めてゐるのである。国民が中華民国と誇称する所以であるが、元々誇称に過ぎないのであつて、厳密な意味からすれば、国境を規定する能はざる国である」と。また加藤繁「歴史より観たる支那の統一と分裂」(『支那学雑草』生活社、一九四四年所収)にいう、「初めに支那といふ言葉の意味について一言して置きたい。私共の扱方では、単に支那といへば、支那本部を指すのである。即ち支那民族の本来居住し国を建てた土地を指すのであつて、満洲・蒙古・新疆等は含まれない。満洲・蒙古・新疆は支那民族以外の民族即ちツングース、モンゴル、トルコ、チベタン等の諸民族の居住した処で、本来支那国家の領土でなく、支那国家の勢力が興隆した時のみこれを征服して領土とした処、而もこれ等の地方全体が支那国家の領土と為つたのは清朝時代だけのことであつた。されば歴史の上からしても、民族からしても、支那本部と満洲その他とは明白に区別すべきものであつて、支那といふ言葉は支那本部のみに対して使用するのが適當である」と。

- (5)顧頡剛・王樹民「夏」和「中国」——祖国古代的称号(『中国歴史地理論叢』第一輯、陝西人民出版社、一九八一年)参照。
- (6)松浦友久・植木久行『長安・洛陽物語』(集英社、一九八七年)の「はじめに」参照。
- (7)植木久行「瀚海・海風考——辺塞詩の「海」字の解釈をめぐつて」(早稲田大学『中国文学研究』第八期、一九八二年)。なお吉川幸次郎「森と海」(『吉川幸次郎全集』第一九卷所収)も参照。
- (8)前野直彬「風月無尽——中国の古典と自然」の「海」参照(東京大学出版会、一九七二年)。
- (9)石川忠久「文学に現れた海——中国と日本」(『中国文学の比較文学的研究』汲古書院、一九八六年所収)。
- (10)『送秘書監還日本国』
- (11)中野美代子「辺境の風景——日本と中国の国境意識」(北海道大学図書刊行会、

一九七九年)に収める「北方論—世界の中の北海道」参照。なお、その「北方論」には、「中国人は、文明を野蛮からまもるために方角観念を確立した」と指摘する。同「北林の説—中国人における北方」(前掲「辺境の風景」所収)にはいう、古代中国人にとつての「きた」の方角は、常にいまわしいイメージをもっていた。匈奴をはじめとする騎馬遊牧民族が侵入し、中国文明の原点である肥沃な農耕地を荒す、その方角が「きた」だったからである。そこで彼らは、万里の長城を築き、これら野蛮な騎馬遊牧民族の侵入を防いだ。長城は、かくして、中国人の空間認識における絶対的な境界線となる。彼らの文明は、ことごとくその境界線以南でいとまれるべく、そこから「きた」に認識を及ぼす必要はなかった。すべては、彼らの牢固たる中華思想、思考の求心性の故であった。「北」とは、かくて、「きた」の方角というよりも、長城以北の地域を具体的に指す言葉に他ならない。Vと。

(12) 『桑原隲蔵全集』(石波書店)第二巻所収。

(13) 生活・読書新知三聯書店香港分店、一九八一年。ここは、その「第一篇 中国文化中心の遷移」による。

(14) 『後漢書』徐釋伝。

(15) 柳宗元「送李渭赴京師序」に、「過洞庭、上湘江、非有罪左遷者罕至。又況踰臨源嶺、下灘水、出荔浦。名不在刑部、而來吏者、其加少也固宜」とある。

なお嶺南地方については、植木久行『唐詩の風土』(研文出版 一九八三年)の「第五章 嶺南」参照。

(16) 植木久行『唐詩歳時記—四季と風俗』(明治書院、一九八〇年)二三〇頁前後、松浦友久『詩語の諸相—唐詩ノート』(研文出版 一九八一年)所収の(二)「猿声」考参照。

(17) 馬正林主編『中国歴史地理簡論』(陝西人民出版社、一九八七年)の四四頁参照。ただし、注(16)の松浦説では、おもにオナガザル系を指すとす。ちなみに、中野美代子『孫悟空の誕生—サルの民話学と「西遊記」』(玉川大学出版部、一九八〇年)の注にいう、△前掲『動物』I(林壽郎著—引用者注)によれば、「ア・オー、ア・オという声をくりかえし、ときどきのどぶくろをかついて、ポクポクといった音をたてるのが特徴」のボウシテナガザル、「遠く

までひびく美しい連続的な、ワウワウというなき声」を出すワウワウテナガザル、「フープ・ポーというなき声」のフロックテナガザル、「金屬的なすばらしくよくひびきわたる大声」は、「三—四キロメートル先まで聞こえる」フクロテナガザルなど、テナガザル科は大声に特徴がある。なお、マカク属のサルの啼きこえについては、李時珍は「嘯嘯(キヤッキヤツ)として效のようだ」と述べている。猴(マカク属のサル、わがニホンザルと同じ仲間のアカゲザルなど—引用者注)の啼きこえは詩的ではないのである。Vと。ただし、最後の「猴の啼きこえは詩的ではない」とする部分は、中国古典の実態にあわない。この点、注(16)の松浦論文参照。

(18) 注(17)の『中国歴史地理簡論』三〇一頁。

(19) 注(16)の松浦論文に指摘される。

(20) 植木久行「ほととぎすのうた—杜鵑と郭公をめぐって」(早稲田大学『比較文学年誌』一五号、一九七九年)参照。また青木正見「子規と郭公」(『青木正見全集』第八巻所収、春秋社刊)の論文もある。

(21) 「潯陽三題」詩のうちの「湓浦竹」。

(22) 『世界紀行文学全集』第十一巻、中国I、所収(ほるぶ出版、一九七九年)。

(23) 桑原隲蔵「アラブ人の記録に見えたる支那」(『桑原隲蔵全集』第二巻所収)。ちなみに、内藤湖南『燕山楚水』に収める「鴻爪記録」のなかの「家屋の構造」の条にいう、「要するに江南の家屋は、木材多く、北方の泥土多きが如くならず、其の竹椽茅屋なる貧人の家は、我邦のに髣髴たり。こゝに独断の史論を吐かんに、南方人種は元と我邦と同じく、熱帯より来りし茅屋人種にて北方の漢族は穴居より進歩して、土石造家屋に住ひたるが、開化の播布は、北より南に及びしが為に、後には南人も、次第に土石造家屋に住ひ、其の木造家屋も、亦益々制を土石屋に擬するに至りしなるべし」と(筑摩書房『内藤湖南全集』第二巻所収)。

(24) ちなみに、三分法をとる場合、二分法の南中国部分を南嶺山脈(五嶺)で二つに分ける。これによれば、黄河・長江・珠江の各流域となる。ただし、従来の二分法による区分のほかに、蜀(四川省)の地を独立させて三分法とする見方もある。(竹内実『茶館—中国の風土と世界像』(大修館書店、一九七

四年」に引く田岡嶺雲『蘇東坡』(支那文学大綱)の説。

(25) 松田壽男著作集』5(六興出版)に収める『アジアの歴史』「五 中国の北と南」など参照。また加藤繁『経済史上より観たる北支那と南支那』(『支那学雑草』所収)参照。

(26) 桑原臨蔵『歴史上より観たる南北支那』(前掲)参照。

(27) 李璠『中国栽培植物発展史』(科学出版社、一九八四年)による。ただし、篠田統『中国食物史』(柴田書店、一九七四年)は、元の時代に黄河大平原に伝わつたとする(二八三頁)。また江口曼・玉井建三『中国の自然と社会』(文化書房博文社、一九七六年)には、四世紀初頭、蜀国(四川省)から大陸本土に広がつた作物とする。

(28) 注(4)に引く『地理講座 外国篇第二巻 支那』所収。

(29) 注(7)の『中国歴史地理簡論』二二三頁。

(30) 何学威『中国風土語彙釈』(湖南美術出版社、一九八六年)参照。

(31) 注(7)に引く篠田統『中国食物史』一〇七頁。

(32) 加藤繁『歴史より観たる支那の統一と分裂』には、長江を国境としたのは、「南北朝の末と周の世宗の時と、前後唯だこの二つだけである」とする(前掲『支那学雑草』所収)。

(33) 斯波義信『宋代江南経済史の研究』(汲古書院、一九八八年)の「考察の端緒」に紹介される説。

(34) 淮河はほとんど氷結しない。

(35) 原文は「河水重濁、号为一石水而六斗泥」とある。

(36) 注(30)の『中国風土語彙釈』に見える。

(37) 水利部黄河水利委員会『黄河水利史述要』(水利出版社、一九八二年)の第五章参照。

(38) 『中国人民共和国地图集』一九八三年版(地图出版社)の「中国水系流域」の条。

(39) 黄錫奎ほか『我国的河流』(商務印書館、一九八二年)七〇頁など。

(40) 注(7)の『中国栽培植物発展史』二一〇頁。

(41) 注(25)の『松田壽男著作集』5と同じ。

(42) ただし、唐代は温暖期にあたり、北の都長安でも、梅の花が咲き、橘(柑橘)が実をつけた(今日より、かなり暖かかったらしい)。陳正祥『詩的地理』(商務印書館香港分館、一九七八年)三〇頁や、注(7)の『中国歴史地理簡論』四頁など参照。

(43) 『支那文学研究』(弘文堂書房、一九二五)に収める「支那文学者の地理上の分布」。

(44) 『青木正児全集』第一巻の第一章、序論。

(45) 桑原臨蔵の『晋室の南渡と南方の開発』(『全集』第一巻所収)には、六朝期の南北の差について、「先づ、『顔氏家訓』や『南史』、『北史』等を材料として当時の南北の風尚を比較すると、南方では茗(茶)を飲み魚を食つたが、北方では酪を飲み肉をくらつた。南人は老荘を尚び、室内の清談に耽つた間に、北人は郊外の守獵に馳驅した。南人は奢侈懦弱であつたが、北人は質実剛健であつた。南朝の官人は皆輿に乗り、偶馬に乗る者があると、世の指彈を受けたが、北朝は皆騎馬に限つた。北の儒生は皆兵射に達して居つたが、南方では余り流行せぬ。北人は女は織紵(紵)に、男は農耕に力めて、一般に勤儉の風があつたが、南人は一体に織耕を厭ひ、殊にその貴族は不斷の安逸を貧つた。生計に余り頓着せぬ南人は、概して数字に不得手であつたが、北人はその反対に尤も算数に長じて居つた。南北ともに魏晋の後を承けて、門閥を重んじたが、南朝は殊に極端であつた。従つて譜学の流行も南朝が一層で、士庶の区別も、官途の制限も、頗る嚴重であつたが、塞外種族の勢力ある北朝では、この弊がやや少い。要するに北方では塞外の殺伐の風が著しく、南方では漢族文弱の風が目につく」と。さらにまた、「当時の経学界を見渡すと、北人は訓詁を重んじ、南人は義理を重んじる。北人は東漢の旧学を承け、南人は魏晋の新学を承けた」。「南朝の書風はすべて婉麗清雅で、北朝は概して瘦硬古樸」。「南人は文章を尚び、北人は質実を尚ぶ」ともいう。ちなみに、田岡嶺雲『嶺雲搖曳』には、「地、南北を分てば風氣同じからず。……支那に就てみるも……劇然として南北を別つ。……之を要するに南方は多く風土温和、山水秀麗、北方は則ち風物蕭殺、故に北方は其人心沉重に、南方は軽快。輕快故に浮薄に流れ易し、沈重故に迂遠に失し易い。北方は経を守て権を知ら

ず、南方は麥に列して正より逸す。南方は交通多く、北方は守株となる。故に南方は化せられ易く、北方は渝ゆるなし。……南方は華を喜び、北方は実を尚ぶ。北方は樸、南方は文。一擲千金、豪奢を競うて意を一時に快にするは南方の華なり、文なり。美田を買ひ、書を蔽して、子孫の計をなすは北方の実なり、樸なり。南北の風氣それ相反すること此の如し」とある（樺山紘一編『長江文明と日本』福武書店、一九八七年の二六四頁所引）。

(46) 注(4)の「地理講座 外国篇第二卷 支那」所収。

(47) 本文は、さらに引き続いて、「此の関係を支那本部三帯(注④)の一般的な三分法をいう―引用者注)に就いて観察して見ると、粵江(珠江の別名―引用者注)流域は広東人之を代表し所謂革命の淵藪で、革新を好み、急進派の領袖的人物に富む。又黄河流域と揚子江流域とは交通、産業文化の程度に著しき懸隔ありて、揚子江流域は文化頗る発達し、住民は一般に民主的平和の民であるが、黄河流域は然らず、保守的ではあるが武断派の人物に富む」と。(48) 江口受・玉井健三『中国の自然と社会』(前掲)には、「中国の土壤を地形および氣候によつて区分すると、だいたい二つに分けることができる。それは淮河秦嶺線により南部に発達している礫鉄土壤と北部に発達している石灰質土壤である」という。

(49) 後藤朝太郎『最新支那旅行案内』(黄河書院、一九三九年改訂版)にいう、「支那大陸の旅行は、春は南、秋は北が好都合であると見られてゐる。と云ふのは北支那では蒙古風が春の終り四、五月頃に物恐ろしい勢で北方から吹き荒んで来る。全く灰を手づかみにして顔面になげつけるやうな勢でもつて戸外を吹きまくる。黄塵万丈天を見ず、陽ために暗し、と古人も云へる如く昼なほ暗い様子がそのま、理解されるのである」と。清代の『燕京雜記』(撰者未詳。北京地区のことを記す)にいう、「渡河北、漸有風沙、京中尤甚。每当風起、塵氛埃影、冲天蔽日、觀面不相識、俗謂之刮黄沙。月必数次或十数次、或竟月皆然。表説(「塞上曲」)詩曰、「日生方見樹、風定始無沙。馬戴(「塞下曲」)詩曰、「風折旂竿曲、沙埋樹杪平。黃滔(「送友人遊邊」)詩曰、「野燒枯蓬旋、沙風匹馬衝。……皆善狀燕地風沙之景」と。またいう、「風沙之起、触処皆是、重廉疊幕、單牖籠窗、然鑿隙潛來、莫知其処、故几席間私

之旋積。古人謂京師輒紅塵土、不其然乎」と。

(50) 「終に風ふき」は「終風」(一日中吹く風)とも読める。ここでは、王念孫の説に従う。

(51) 唐代でも、中宗の景竜元年(七〇七)十二月丁丑(十三日)、「京師(長安)、土を雨ふらす」の記事がある。(『旧唐書』卷七、中宗紀)。

(52) 水谷誠「十里黄雲白日曛―「黄雲」ノート」(『中京大学教養論叢』第二六卷 第一号、一九八五年) 参照。

(53) 注(2)の『世界紀行文学全集』第十一卷所収。

(54) 「白居易「感鏡」詩をめぐって」(早稲田大学『中国文学研究』第八期、一九八二年所収)。また鈴木修次「人生有情―警策のことば」(『東京書籍株式会社、一九七七年』)に収める「黄塵・紅塵・香塵」も参照。

(55) 注(17)の『中国歴史地理簡論』一四九頁以下参照。

(56) 注(15)の『唐詩の風土』第三章、江南の条参照。また周振鶴「唐代安史之乱和北方人民的南遷」(『中華文史論叢』一九八七―二・三合併号)も参照。

(57) 韋莊「菩薩蛮」に、「人人尽説江南好、遊人只合江南老、春水碧於天、画船聽雨眠」云云とある。

(58) 引用文の前にも、「江南の春は旅行気節として最もお勧めしたのであるが、たゞ如何にもその季節が短い。北支の秋も僅か一月月足らずですぐ冬になつてしまふが、南方の春はそれよりもなお短い。うかうかしていると一足飛びに真夏の温度に急転する。この春の佳節の短いことは一段と春宵千金の夢など云つて、これを惜しがるわけにもなるのである」という。

(59) 白居易「桐花」詩に、「况吾北人性、不耐南方熱」とある。

(60) 「九日宴集 醉題郡樓、兼呈周殷二判官」。

(61) 宋の朱長文『吳郡圖經統記』巻中に、「吳郡(蘇州)、昔、橋梁多し」とある。

(62) 唐の陸広微『吳地記』 参照。

(63) 小川昭一『中国の名詩鑑賞? 晩唐』(明治書院、一九七六年)には、「綺羅」を「着飾つた美人たち、おそらく船員や乗客を相手とする女性たちであろう」とし、渡部英喜『長江漢詩紀行』(昭和堂、一九八六年)も、ほぼ同じである。しかし、ここでは、蘇州市聯選注『蘇州詩詞』(上海古籍出版社、一九八

五年)にしたがつて蘇州産の絹織物を指すと捉えたい。塩見邦彦(唐代の「夜市」(『鳥取大学教育学部研究報告』(人文社会科学) 第三九巻第一号(一九八八年)所収)も、「綺羅」を「あやぎぬ・うすぎぬ」とする。

(64)第二次中国都城制研究学術友好訪中記録『中国江南の都城遺跡—日本都城制の源流を探る』(同朋舎出版、一九八五年)所収。なお、高泳源「古代蘇州城市布局の歴史発展」(『中華文史論叢』一九八四—二)も参照。

(65)林芙美子「秋の杭州と蘇州」には、蘇州について、「街はヴェニスのように水路が縦横に開けている。……清からざる水路で、米や青菜を洗っている娘達や、河上の船の中では、子供が体を乗り出して茶碗と箸を洗っている。そのじきそばで、四五人のお上さん連が、言葉や豆のように弾かせながら、馬桶マボクを洗っている。よく病気になることだと、支那人に聞くと、彼等は一切油や醬油で煮るから大丈夫だと言う」と記す。(注(62)の『世界紀行文学全集』第十一巻所収)。

(66)「長江遊記」(注(62)の『世界紀行文学全集』第十一巻所収)。

(67)後藤朝太郎「最新支那旅行案内」にいう、「南支那ではクリークの水が一般に飲料水となつて居り、洞庭湖や揚子江方面ではその湖江の水を汲み上げてこれを台所に用ひてゐる。四川の重慶、万県あたりでは態々石段を下つて長江の濁流を汲み、天秤棒でかついで我家に運んでゐる。これは船頭や筏の上に住む人達と同じやうに、汲み取つた濁水は大きな甕に入れ、明礬を一掴みぶち込み、長い棒で掻きませ、その泥の沈澱するのを待つて上澄みのところを汲み取り、茶を沸かし、飯を炊くのである。下層民に至つては明礬を買ふ金を持たず、濁流をそのまま汲み取つて、茶を沸かし、めしを炊いてゐる。ためにめしの色がや、赤味を帯びてゐる」と。

(68)范長江「中国の西北角」(松枝茂夫訳、筑摩叢書、一九八三年)にいう、「馬連河は甘肅東北高原地帯の水のハケ口だ。この黄土高原には森林乏しく、地質も水分を貯蔵するに不適であるため、雨季になると、よく山洪水が暴発する。しかも乾季には、河の水は糸のごとく細り、随处に徒渉できるのみならず、一般の飲料水にも不自由を来たす。もつとも普通の飲料水の来源は、土の窖あなごうを掘つて雨季中の雨水を貯めておくことだ。井戸はよほど深く掘らなけ

れば出ないため、普通人の経済力では作れない」と(八九頁)。また、後藤朝太郎「最新支那旅行案内」にいう、「北方にありては南方の如く湖水や河流が多くない。そのため農村はもとより城内にありても井戸を掘つて水を得る。その井戸は概して深く、直径は長い。井戸の上に石を並べて蓋となし、僅かに釣瓶の上げ下しの出来る程度の孔をあけてゐる。片田舎にありては二ヶ村三ヶ村にやつと一つの井戸を共有してゐる。そのため村人は星をいたいて夜中から天秤棒をかついで汲みに来る。水の尊きことはこの一事でも分る。一ぱいの洗面器の水で三人五人と顔を洗ふその事情もこれから想像されるであらう。南方の城内にはもとより井戸もあるが、井戸の水によらなくてもよいのである。ところが北方は井戸によるのほか水を得る方法がつかない。山西省の如きは掘れば掘るほど無煙炭は出るが、水は出て来ない」と。

(69)注(68)の松浦友久「諸語の諸相—唐詩ノート」の「十一 一水中分白鷺洲—詩材としての風土」にいう、「詩材としての風土」という視点を設定し、そこから個々の風土の題材としての性格(あるいは屬性)を考えていく、という方法の基礎的な(例外なき、の意ではない)有効性についてである。たとえば、ある特定の山河なり湖沼なりが詩歌の題材となる場合、それは恐らく、恣意的かつ無原則に題材となっているのではないはずである。そこには、その山や河のもつ風土的・歴史的・文学的な性格(屬性)が、題材化のうえで大切なポイントとして働いていることが考えられる」と。